

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：14403

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K02663

研究課題名（和文）高等学校国語（現代文）における詩教育の新たな展開

研究課題名（英文）New Developments in Poetry Education in High School National Language (Modern Literature)

研究代表者

石橋 紀俊 (Ishibashi, Noritoshi)

大阪教育大学・教育学部・教授

研究者番号：50274999

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 900,000円

研究成果の概要（和文）：日本におけるコンクリートポエトリー運動を牽引した新国誠一の作品に注目し、その再評価を試みた。またコンクリートポエトリーを、解釈だけでなく創作活動を含めた高等学校国語の新たな詩教育の可能性につなげた。さらには、萩原恭次郎や草野心平の前衛的な作品を取り上げ、詩的感性を重視した読みから認知論的な読解への展開を可能とするために、詩の解釈のプロセスを協調の原理と関わらせながら解き明かしコンテキストの重要性を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの詩教育は内容重視の主題論や、個々の詩的感性に立脚する印象批評的読みが主だったと言える。それ自体間違っていないが、より多様で豊かな詩教育の展開のために、そのような読み方が有効に機能しないコンクリート・ポエトリーや前衛的な詩を取り上げ、それらを有効に読み解くための方法論として、読解の有効性を保証するコンテキストを事後的に見出すことが重要である点を導いた。また多様な読みもまたコンテキストの転換によっていることを明らかにすることで、コンテキストに対する認知の重要性を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：I tried to re-evaluate the works of Seiichi Niikuni, who led the Concrete Poetry Movement in Japan. In addition, I connected concrete poetry to the possibility of new poetry education for high school national language that includes not only interpretation but also creative activities. Furthermore, I took up the avant-garde works of Kyojiro Hagiwara and Shimpei Kusano, and clarified the importance of context by clarifying the process of interpreting poetry in relation to the principle of cooperation, in order to enable a development from a reading that emphasizes poetic sensibility to a cognitivist reading.

研究分野：日本近代文学

キーワード：詩教育 コンクリート・ポエトリー 協調の原理 コンテキスト

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

### 1. 研究開始当初の背景

グローバル化が進展し異文化接触が日常化するなかで、異なるルーツや価値観をもつ他者を理解するとともに、他者に向けて的確に自らを表現したり情報発信したりするためには、多様で豊かな言語活動に積極的に関わり、コミュニケーションツールとしての言語に留まらず、含意を含めた多面的で深い言語理解を可能とする国語教育が求められている。

また、現行の学習指導要領では“主体的・対話的な深い学び”の重要性が示され、“見方・考え方”にまで学びを深めることの意義が指摘された。

“見方・考え方”にまで遡る“主体的・対話的で深い学び”を国語教育において実践するために散文教材が重要なのは言うまでもないが、多様かつ“深い学び”に寄与するという点で詩教材を的確に位置づけ、創作活動を含めた効果的な詩教育の新たな展開が必要となる。

にもかかわらず、これまで詩教育が必ずしも豊かに展開してきたとは言えない。それは詩の解釈が詩的感性に基づく印象論的な方法に偏り、分かる生徒には分かる一方で分からない生徒は分からないという認識が多少なりとも教員の側にあることが要因の一つだと言える。このような現状にあって、詩の読解とはどのような行為なのかを捉え直した上で、新たな教材選択を含め詩教育を活性化することが求められている。

### 2. 研究の目的

国語教育において詩教育の停滞が否めない理由の一つは、内面重視の主題論や詩的感性に拠る印象論的な読みを中心とした従来型の教材理解や、叙情詩を主とする限られた詩教材の選択に要因があると言える。この点を踏まえ、高等学校の現代文を想定しながら、言語表現に着目した読解法や、言語学的な知見を応用しながら詩の読解を認知論的に実践する方法論を見出し、新たな詩教材の開発、及び創作活動を含めた詩教育の新たな展開の方向性を見出すのが本研究の目的となる。

### 3. 研究の方法

基礎段階及び発展段階に分け、それぞれ主に次のような観点を設定した。その上で順次論点を整理しながら、研究活動に加え、大学でのゼミや授業実践等を含めて幅広く研究を進めた。

なお基礎段階は、詩読解において一般的に必要とされる観点の再確認となる。発展段階は、それらを踏まえながら、本研究が研究対象とする詩作品の読解を実践するための観点になるとともに、詩読解のプロセスの理論的研究を遂行するための視点となる。

#### (1) 基礎段階

##### a. 比喩表現と“見方・考え方”

詩読解のための基礎知識として、単なる修飾や文彩ではなく、ものの“見方・考え方”に深く関わる言語使用のあり方として比喩表現を位置付ける。

##### b. 表現論的読解方法

“何”が書かれているかに着目する主題論に対して、“どのように”書かれているのかという面を重視する表現論的読解を詩読解において実践する。

##### c. 象徴とは何か

象徴表現は「可視的なものによって不可視のものを表現する慣習的なあらゆる行為」（アーサー・シモンズ 2006）と定義し得るが、詩表現において象徴の機能は必要不可欠なものとなる。象徴表現に着目した読解を実践しながらその適切性の所在を検討する。

#### (2) 発展段階

##### a. 草野心平の詩作品読解の実践

コンクリート・ポエトリーの先取りとも言える草野心平の作品を取り上げ、具体的な読解方法を提案する。

##### b. 新国誠一のコンクリート・ポエトリー作品の読解及び再評価

コンクリート・ポエトリーは1950年代に提唱され、その後国際的な運動とともに広がった。具体詩とも訳され、意味内容ではなく言語の視覚的・聴覚的な面に着目した新たな表現の可能性を追求しようとする前衛的な試みであるが、日本のコンクリート・ポエトリー運動を牽引した新国誠一の作品を取り上げ、その再評価を試みるとともに、コンクリート・ポエトリーの詩教材としての可能性を明らかにする。

##### c. 前衛詩の読解

日本の代表的な前衛詩人と言える萩原恭次郎の詩を取り上げ、従来型の読解とは異なる読解法を見出す。

d. 語用論的言語理論と詩読解

イギリスの言語学者ポール・グライスの言語理論によって、詩及び文学の読解を理論的に基礎付ける。

4. 研究成果

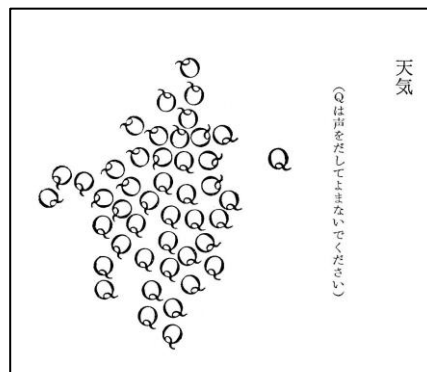
初年度となる2018年度は、まずは比喩表現の基礎的理解に努め、類似性に基づくメタファー（隠喩）、近接性に基づくメトニミー（換喩）、類と種との包摂関係に基づくシネドキ（提喩）等について整理した。また比喩表現は表面的な言葉の置き換えや単なる修飾や文彩ではなく、ものの“見方・考え方”に深く関わる点を重視し、新たな比喩表現とは、新しいものの“見方・考え方”の創出となることとして位置づけた。

さらには“何”ではなく“どのように”書かれているのかという面を重視する表現論的な読解の実践として、学部3回生のゼミ活動のなかで明治30年代を代表する詩集と言える土井晩翠『天地有情』に注目し、作品講読を通して、象徴的な含意を含めて詩表現全体の理解を深めた。具体的には、昼夜の循環が四季の循環に包摂され、さらにその上位に宇宙的時間が組み込まれるという時間の三層構成を明らかにした上で、人間的な叙情が自然的・宇宙的叙情に浄化されることを作品のテーマとして導いた。この試みは、時間や自然等に関わる豊かな表現効果やテーマを語彙のつながりやイメージの連鎖において捉え、象徴的な領域において宇宙的広がりをもつ晩翠の詩世界を導き、個々の詩篇を越えた『天地有情』という詩集全体の意義を再評価する実践だったと言える。

コンクリート・ポエトリー研究では、その先駆的な作品として位置付けることのできる草野心平「冬眠」の読解を試みた。草野の「冬眠」は黒丸記号●のみを書き記す作品であるが、単なる記号に過ぎない●が詩作品「●」として成立し、読解可能となるためのコンテキストを捉え、それを認知するプロセスを新たな詩教育の具体的な方法の一つとして位置づけた。

これらの点については、単著論文「草野心平「冬眠」の詩作品／詩教材としての可能性—コンクリート・ポエトリーと詩的記号、あるいは相互テクスト的関係をめぐって—」（『日本アジア言語文化研究』第13号 2019）にまとめられている。

この論考では、さらに右図の「天気」（図は『草野心平全集』第2巻による）にも触れ、「Q」をオタマジャクシに見立てた視覚的な詩であることを示し、冬眠「●」同様視覚に訴える詩作方法が草野の特長であることを示した。



また「冬眠」には、「●」のみを記すのとは別にもう一つのバージョンが存在する。言わば「●」を言語化したものとも言えるもう一つの「冬眠」に死と再生のドラマを読み取り、「●」が内包するイメージを言語化したものとして位置づけた。加えて「冬眠」を収めた詩集に着目し、詩集全体のコンテキストの中でこの作品の読解を試みた。

結論として、単なる記号に過ぎない●を「冬眠」と題された詩作品「●」として読解するためには、それが有意味であることを保証するコンテキストが必要であるとし、●が単なる記号か芸術作品かを分かちのは、それを有意味な詩表現として捉えるコンテキストを読者が見出し得るかどうかにかかっている点を証した。

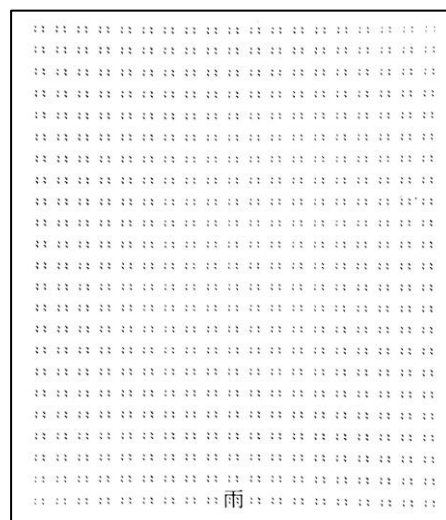
2年目となる2019年度は、草野心平や萩原恭次郎の理解を深めるために生地訪問や記念館・文学館の見学を行い、それぞれの作品を理解するための背景に対する知見を広げた。

方法論的な点では、コンテキストの問題を言語学的に捉え直し、グライスが提唱する“協調の原理”と関わらせることの有効性について検証した。

またこの年度のコンクリート・ポエトリー研究としては、新国誠一の作品の再評価を試み、単著論文「新国誠一作品試論—コンクリート・ポエトリーの詩作品／詩教材としての可能性—」（『日本アジア言語文化研究』第14号 2020）にまとめた。

この論文では、絵画的でもある新国のコンクリート・ポエトリー作品を固定的に捉えるのではなく、漢字を巧みに図像化したり、意味を二重化したり、時間を取り込んだりすることで鑑賞者＝読者の価値観を揺さぶるダイナミックな言語表現として読み解いた。

例えば、右図「雨」（図は『新国誠一 works 1952-1977』による）は象形文字の成り立ちそのものを図像化した作品だと言え、雨という漢字が成立する時点まで時間を巻き戻す試みと言える。その他主要な新作作品について解説しながら、視覚に訴えるこれらのコンクリート・ポエトリーの言語表現としての可能性について論じた。



さらに、このことを国語における“主体的・対話的で深い学び”で重視される“言葉による見方・考え方”につなげ、生徒の言語観や文学観を異化する詩教材として位置づけるとともに、コンクリート・ポエトリーを創作する実践の有効性や意義を示した。国語の授業にコンクリート・ポエトリーの創作を取り入れたものとしては、児玉（1977）の先駆的な実践があるが、児玉があくまでも内面表現を重視するのに対して、むしろ内面にとらわれず幅広い視点で創作することが重要であることを指摘した。

また、これらの成果を、大学の授業実践（授業名「日本文学研究 I B」）に取り入れ、コンクリート・ポエトリーの解説に留まらず、その創作も実践し、受講者による自らの作品のプレゼンテーションを含めたワークショップを行った。さらには教員免許更新講習のなかで、詩教材としてのコンクリート・ポエトリーの可能性を講義することで研究成果の教育現場への還元に努めた。

3年目となる2020年度は、詩読解を理論的に捉え直すためにグライスが言語理論を応用しながら、詩を意味ある言語表現として認知するプロセスの精緻化を試みた。その具体的な例として、萩原恭次郎の詩集『死刑宣告』のなかでも「ラスコーリニコフ」という前衛的で難解な作品を取り上げ、この作品を有効に解釈するためには、解釈の有効性を保証するコンテキストを設定する必要がある点を導いた。このような試みを通して、詩の読解にけるコンテキストの機能について考究し、多面的な読解を可能とする方法としてコンテキストを転換させることの意義や有効性について探究した。

ただしコロナ感染拡大に伴うオンライン対応のためこの年及び次年度において2年間の研究延長を行った。


延長期間中となる2021年度は、ゼミ活動において短詩形を特徴とする日本近代の詩人八木重吉を取り上げ、象徴性の高い各詩篇についてキリスト教、病、文学コミュニケーションなどに関わるコンテキストを設定しながら、それぞれの詩篇の解釈を試みその適切性や有効性を検証した。

また、兵庫県伊丹市主催の市民講座で「文字で絵を描く方法 コンクリート・ポエトリー（具体詩）とは何か—新国誠一や草野心平の作品をめぐる—」という題目の講演（2021年9月6日（月）14:00～15:30）を行い、一連の研究成果の社会的還元を努めた。

最終年度となる2022年度は、グライスの言語理論における“協調の原理”や“会話の4格率”を文学読解に応用するための方策を見出しながら、コンテキストの重要性をあらためて明らかにした上で、詩を含めた文学一般の理論的基礎付けを試みた。その成果は単著論文「文学作品の読解とはどのような行為なのか—文学コミュニケーションと協業の原理 草野心平「冬眠」・萩原恭次郎「ラスコーリニコフ」を例として—」（『日本アジア言語文化研究』第17号 2022）にまとめられている。

この論文では、これまでの成果を踏まえつつ、グライスの提唱するコミュニケーション行為における“協調の原理”及び“会話の4格率”と文学作品の読解との連関について論じた。“会話の4格率”とは、関連のある話題について真実を適切な表現によって述べなければならないとするものであり、その格率を協調的に遵守しなければならないとするのが“協調の原理”であるが、会話の適切性や真実性はその場のコンテキストを参照することによって保証されることになる。コンテキストを重視する点がグライスの言語理論の要点の一つとなるが、日常会話においては参照すべきコンテキストがあらかじめ与えられているのに対して、文学テキストはそれを欠いている。論考ではこの点を重視し、文学テキストの読解においては自らの解釈の適切性や

真実性を保証するコンテキストを事後的に設定することが求められることを明らかにするとともに、この点を右図の萩原恭次郎「ラスコーリニコフ」(図は『萩原朔太郎全集』第1巻による)の先行研究によって検証した。

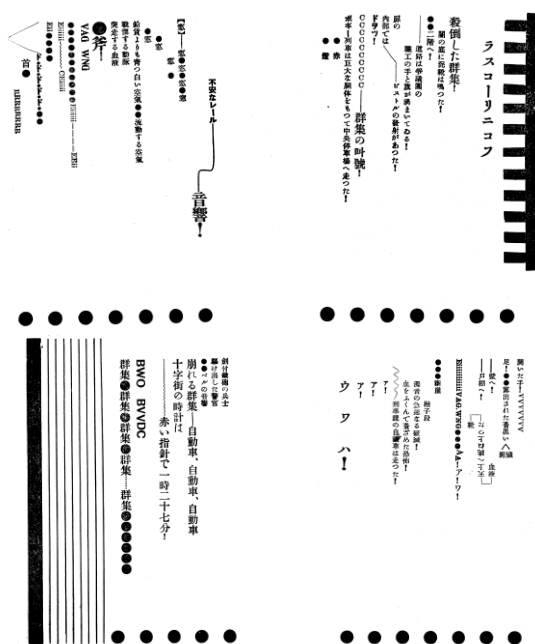
例えば宮本(1987)はこの詩に「群衆の必死の騒擾」を読み取り、「多層多面、立体的に沸騰し流れゆく群衆」を描く作品として読解するが、この読みの有効性は、この作品が都市の騒乱状態というコンテキストに関わっているという想定に拠っている。また、古俣(1989)の指摘で興味深いのは、「右側に下まである  や、詩の後ろに付せられた八本の縦の直線及び縦の黒帯が、劇場や映画館の開かれた緞帳(幕)であ」とし、「●」を「観衆(の頭)」と解釈している。古俣は、この詩を劇場や映画館というコンテキストに置きながら、この詩を舞台やスクリーンのなかの一場面に見立てていることになる。これらの読解は、この詩の言葉が有効に機能するコンテキストを想定しながら“会話の4格率”を満たす最適解としての解釈を見出そうとする実践と言える。

またその延長線上に、新しい解釈として、「ラスコーリニコフ」を読書行為の原点ともなる活字との出会いそれ自体に読者を差し戻す作品であるという解釈を示した。そもそも読書行為とは、活字を言語として意味付けながら作品世界をイメージ化する試みに他ならない。ゆえにそれは、読者のイメージ世界のなかにインクの染みに過ぎない活字の物質性を解消するプロセスでもある。恭次郎はこのプロセスを意図的に挫折させ、言わば読書行為の原点とも言える活字との対面の瞬間に常に差し戻すための実践として、「ラスコーリニコフ」を含めた詩集『死刑宣告』を構想している。まさにこの詩を読んでいる読書というコンテキストのもとにこの詩を置き直すとき、このような解釈も可能となる点を示した。

またこの年度には、詩教育に関わる実践として、大阪教育大学附属池田中学校の公開授業(令和4年10月17日(月)6時限 於2年D組)において、茨木のり子の詩作品「わたしが一番きれいだったとき」を教材とした授業実践に助言指導者として関わった。象徴表現の読解や作品の含意という点に重点を置きつつ、当日のみでなく授業構想段階を含めて助言等を行った。

#### 【参考文献】

- ・ポール・グライス『論理と会話』清塚邦彦訳 勁草書房 1998年
- ・アーサー・シモンズ『象徴主義の文学運動』1899 山形和夫訳 平凡社 2006年
- ・草野心平全集』第2巻 筑摩書房 1981年
- ・『新国誠一 works 1952-1977』思潮社 2008年
- ・児玉忠『高等学校 文章表現の授業』溪水社 1977年
- ・『萩原恭次郎全集』第1巻 静地社 1980年
- ・宮本喜久雄「『死刑宣告』批評・断面」『萩原恭次郎の世界』伊藤信吉他編 煥乎堂 1987年
- ・古俣裕介「萩原恭次郎『死刑宣告』論一」『中央大学文学部紀要』130号 1989年



5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 石橋紀俊	4. 巻 14
2. 論文標題 新国誠一作品試論 コンクリート・ポエトリーの詩作品 / 詩教材としての可能性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本アジア言語文化研究	6. 最初と最後の頁 23-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 石橋紀俊	4. 巻 13
2. 論文標題 草野心平「冬眠」の詩作品 / 詩教材としての可能性 コンクリートポエトリーと詩的記号、あるいは相互 テクスト的關係をめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本アジア言語文化研究	6. 最初と最後の頁 35 55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 石橋紀俊	4. 巻 17
2. 論文標題 文学作品の読解とはどのような行為なのか 文学コミュニケーションと協調の原理 草野心平「冬眠」・萩 原恭次郎「ラスコーリニコフ」を例として	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本アジア言語文化研究	6. 最初と最後の頁 55-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------